

# GIGA スクールに適応できている子の特性

Characteristics of Children Adapting Well to GIGA School

水野 一成\*<sup>1</sup> 近藤 勢津子\*<sup>1</sup>  
Kazunari Mizuno\*<sup>1</sup> Kondo Setsuko\*<sup>1</sup>

NTT ドコモ モバイル社会研究所\*<sup>1</sup>  
NTT DOCOMO Mobile Society Research Institute\*<sup>1</sup>

<あらまし>本研究の目的は、2024 年 11 月に実施した調査データを基に、GIGA スクール構想に適応している小中学生の特徴を明らかにすることである。分析の結果、「GIGA スクール構想への適応」と「学年」「自己肯定感」「ICT スキル」「学校適応度」「授業における情報機器の利用頻度」との間に有意な関連が確認された。さらに、学年を 3 区分して再分析したところ、すべての学年において「学校適応度が高い児童・生徒」が「GIGA スクール構想への適応」において高い適応度を示していた。また、小学生においては、授業における ICT 利活用といった学校関連要因も適応度に影響していることが明らかとなった。

<キーワード> GIGA スクール構想、小学生、中学生、定量調査

## 1. 研究背景及び目的

GIGA スクール構想開始以来、コロナ禍によるオンライン授業の普及も相まって、教育現場における ICT 活用は大きく伸びた。しかし、端末やネットワークの物理的整備が進む一方で、ICT 活用が児童生徒の学習適応度や学力、情報活用能力にどのような影響を与えているのかについては、体系的な検討が十分とは言えない。先行研究では、ICT 活用の有効性や課題が個別に報告されているものの、学校適応度と GIGA スクール適応度の関連性を包括的に分析した事例は少ない。本研究は、こうした背景を踏まえ、GIGA スクール構想に適応している児童生徒の特性を明らかにすることを目的とする。

## 2. 調査概要

調査対象：2024 年 11 月  
調査対象：全国、小中学生とその親  
調査方法：訪問留置法  
標本抽出法：層化二段抽出法  
性別・学年・地域・都市規模で割付  
回答数：1,300 組（分析対象は、学校の授業で情報機器を利用したことのあり、分析に関する設問を全て回答した小中学生 1,091 人）

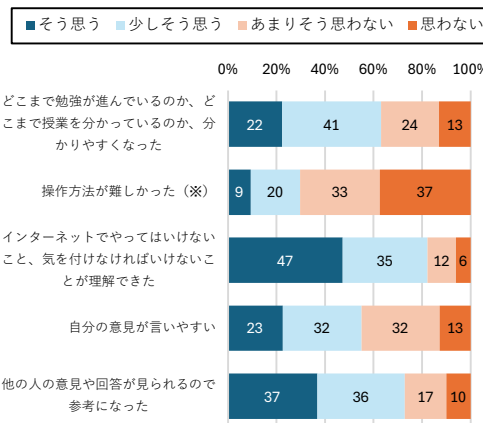
## 3. 分析方法

- GIGA スクールへの適応に関する回答結果を点数化、これを従属変数とした
- 子の属性等を独立変数とし、重回帰分析により特性を明らかにする

## 4. 分析結果

### 4.1. GIGA スクール適応度（従属変数）

「GIGA スクール適応度」は文部科学省が作成した「GIGA スクール構想ガイド」を基に作成した 5 問 4 件法を用いた。結果は図 1 の通りである。当結果を基に点数化（そう思う 4 点、まあそう思う 3 点、あまりそう思わない 2 点、そう思わない 1 点）し、これを従属変数（最高 20 点～最低 4 点）とした。



※逆転項目

図 1 GIGA スクール適応

#### 4.2. GIGA スクール適応している子の特性

独立変数は児童・生徒の属性,特性,ICT 関連及び,学校に関わる項目 9 項目とした.重回帰分析を行った結果,表 1 の通り GIGA スクールの適応と関連が確認できたのは「学年」「自己肯定感」「ICT スキル」「学校適応度」「授業での情報機器の利用頻度」であった.なお決定係数は  $r^2=0.20$  である.「学校適応度」は川崎や石田らの「学校適応感尺度」から 7 問, 4 件法で調査した結果を用いた.

#### 4.2. GIGA スクール適応している子の特性 (学年別)

学年により差が見られたため(図 2 参照), 学年を 3 つに分け,再度重回帰分析を行った.表 2 は,学年ごとに重回帰分析を行った結果の中で「標準化係数」と「有意確率」を抜粋した.なお決定係数は小学生低学年と高学年は  $r^2=0.24$ ,中学生は  $r^2=0.17$  であった.

学年問わず「学校適応度」が高い傾向が見られた.

表 1 重回帰分析の結果

(定数)	非標準化係数		標準化係数		t 値	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差	標準化係数	ベータ			許容度	VIF
(定数)	4.66	0.798			5.841	<.001		
学年	0.127	0.046	0.11		2.774	0.6%	0.511	1.956
性別	-0.015	0.166	-0.003		-0.089	92.9%	0.981	1.019
新しいものの好き	0.107	0.11	0.029		0.968	33.3%	0.918	1.09
自己肯定感	0.184	0.05	0.123		3.698	<.01%	0.734	1.362
スマホ利用時間	-0.048	0.089	-0.019		-0.544	58.6%	0.7	1.429
ICTスキル	0.128	0.034	0.147		3.791	<.01%	0.539	1.857
学校適応度	0.221	0.028	0.272		8.022	<.01%	0.707	1.415
学校での成績	0.103	0.088	0.035		1.171	24.2%	0.895	1.117
授業での情報機器の利用頻度	0.364	0.064	0.165		5.658	<.01%	0.957	1.045

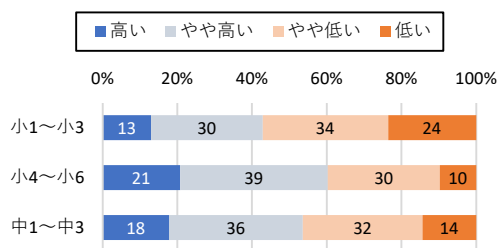


図 2 学校適応度 学年別分布

	標準化係数			有意確率		
	小1~小3	小4~小6	中1~中3	小1~小3	小4~小6	中1~中3
学年	0.14	0.06	-0.07	1.9%	22.0%	21.4%
性別	-0.03	0.07	-0.05	57.3%	12.8%	29.8%
新しいものの好き	0.06	-0.01	0.05	23.0%	79.0%	32.6%
自己肯定感	0.14	0.09	0.14	1.7%	7.8%	3.4%
スマホ利用時間	0.03	-0.07	-0.02	56.3%	16.6%	75.3%
ICTスキル	0.20	0.16	0.08	<.01%	0.2%	16.9%
学校適応度	0.24	0.34	0.27	<.01%	<.01%	<.01%
学校での成績	0.07	0.02	0.00	22.3%	76.3%	98.3%
授業での情報機器の利用頻度	0.15	0.21	0.05	0.5%	<.01%	31.9%

また,小学生のみで関連が明らかになったのは「ICT スキル」が高い,「授業での情報機器の利用頻度」が多い,であった.また,小学生低学年及び中学生では自己肯定感が高い傾向が確認できた.

#### 5. まとめ

本研究の結果から,GIGA スクール構想に適応できている児童・生徒の特性について,以下の 2 点を指摘する.

第 1 点は,学年を問わず「学校適応度が高い児童・生徒」である.GIGA スクール構想が学校内での取り組みであることを踏まえると,これは当然の結果に見える.しかし,水野・近藤(2025)の報告によれば,学校適応度が低いにもかかわらず,GIGA スクールには適応できている小学校高学年および中学生が約 2 割存在している.

第 2 点は,小学生において「授業での情報機器の利用頻度」および「ICT スキル」が高いことである.ICT スキルは,パソコンでの文字入力など 14 項目を挙げ,できる項目数を変数化したものである.特に小学生では,パソコン関連スキルの多寡が GIGA スクール適応に関係しており,これらのスキルは授業を通じて獲得された可能性がある.また,授業での情報機器利用頻度は二極化しており,「毎日利用」と「週 1 回未満の利用」がそれぞれ約 3 割を占めていた.この利用頻度の差が,特に小学生における GIGA スクール適応に影響していることが示唆された.

#### 参考文献

GIGA スクール構想概要 文部科学省

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/other/index\\_00011111.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00011111.htm)

(参照日 2025. 11. 12)

学校から貸与されたタブレット・パソコンの

家庭での利用 モバイル社会研究所

[https://www.moba-](https://www.moba-ken.jp/whitepaper/wp25/chap7.html)

[ken.jp/whitepaper/wp25/chap7.html](https://www.moba-ken.jp/whitepaper/wp25/chap7.html)

(参照日 2026. 1. 8)

石田(2009)学校適応感尺度の作成と信頼性,

妥当性の検討,愛知教育大学紀要

川崎(2018)中学校生徒の不安と学校適用状況との関係,千葉商大紀要 第 55 巻 第 2 号

水野一成,近藤勢津子(2025)小中学生の「学校適応度」と「GIGA スクール適応度」の関係. 日本教育工学会研究報告集, 2025(4):328-331.